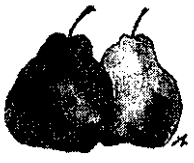
童話と人生



内海善雄
〈ITU事務総局長〉

子供のころに聞かされる童話は、その人の一生の価値体系の形成に大きな影響を与えると思う。

私は、舌切り雀や花咲爺さんの話を聞いたり、その絵本を見て育った。正直者のお爺さんには福が来るが、欲張り者のお婆さんには災いが来るというものである。その背景は田んぼのある農村の絵である。しかし、いかにも平和である。正直にまじめに生活していれば、幸福が転がり込んで来るのであるから。そこには決して生きるための戦いが感じられない。

西洋では、ジャックと豆の木や、赤頭巾ちゃん、シンデレラ姫などであるが、その背景は、森、牧畜、都市と城と、まさにヨーロッパの風景である。天にいた大男の金を奪い、追ってきた大男を殺して裕福になったジャック、森の狼に騙されて食べられた赤頭巾ちゃん、意地悪で嫉妬深い異母姉妹にいじめられるシンデレラ姫と、騙したり、騙されたり、奪い取って殺したり、妬(ねた)まれ、最後は魔法でハッピーエンドと、いずれも索漠とした闘争社会の中で生き抜くためには、力で勝つか、さもなくば、魔法しか解決はないという話である。

競争と戦いの国際社会の真っ只中にいて、私には、西欧童話の教訓が日々の指針になっているが、心の中では、いつも日本童話の価値観との軋轢(あつれき)に苦しむ日々である。いかに知識や経験を得ても、幼児期に形成された基本的な価値観は、容易には変えることができない。

最近の子供たちは、メルヘンの夢の世界や、機械人間のSFストーリーを見たり聞いたりして育つわけだから、いったいどのような価値体系が形成されるのだろうか？　親から子へと語り聞かせる童話が、これら情報化社会の産物に取って代わられつつある現代社会では、さらに宗教の力も少なくなっているわけだから、その影響力は、想像を絶するものがあるような気がする。